

平成28年度
入学試験問題

国 語

特待生
前期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 1 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字になおして答えなさい。

- (1) 作品のヒヒヨウをする。
- (2) 思想のコンカンとなる部分。
- (3) 発言の前にキョシュする。
- (4) 鉄はジシヤクにくつつく。
- (5) 女王がトウチする国。
- (6) 病気のヨチヨウに気づく。
- (7) 友人にオンギを感じる。
- (8) かれは歩くのがハヤい。
- (9) 絹糸を布にオる。
- (10) 他人の失敗をセめる。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

文を改変、省略したところがあります。）

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「雑草のように強い^A」と比喻^{ひゆ}されるように、雑草には「強い」というイメージがある。しかし、植物学では、雑草は強い植物であるとされている。むしろ、「雑草は弱い植物である」と言われている。これは、どういうことなのだろうか。

じつは、雑草と呼ばれる植物は、他の植物との競争に弱いのである。5

植物は、光や水を奪^{うば}い合い、生育場所を争って、激しく競争を繰^くり広げている。雑草はそのような植物間の競争に弱い植物である。そのため、たくさんの植物が生い茂^おるような自然豊かな森の中には、雑草と呼ばれる植物群は生えることができない。

そこで、雑草は、他の植物が生えることのできないような場所を選^{せん}んで生息している。それが、よく踏^ふまれる道ばたや、草取りが頻^{※ひん}繁^{ばん}に行われる畑の中など、人の暮らす場所なのである。草取りをし

たり、耕^かされたりすることは、雑草にとって過酷^{かこく}なことである。しかし、そうして人間が管理することで、強い植物が侵入^{しんにやう}すること

も防がれている。もし、人間が草取りをやめれば、競争に強い植物が次々と侵入して、植物どうしの戦いの末に、やがて雑草を駆逐^{※くちやく}し

15

てしまおうだろう。

禅問答^aのようだが、草取りをやめれば雑草はなくなり、草取りを

することで雑草は生存できるのである。

雑草は、人間の暮らしている場所では、生きることのできない植物である。草むしりはされたくないが、草むしりされないと生きていけない。これが雑草の背負^bっている宿命^{しゅくめい}である。

雑草にとって、人間は敵であるとはい切れない。

じつは雑草は、人間に寄り添^そっているのである。もしかすると、寄生^Bして利用していると言う方が正しいのかも知れない。^①雑草にとつて、人間はなくてはならない存在なのである。

田んぼや畑、道ばた、空き地など、雑草は人間の暮らす場に生える。人が立ち入らないような深い森に行くと、そこには私たちの身近にある雑草は見られない。

雑草は、人間なしには生きられない植物である。¹私た

ち人類が出現する以前に、雑草はどのような場所に生活していたの

だろうか。

雑草の起源は氷河期に遡^{さかのぼ}ると言われている。

競争に弱い雑草は、^Xような場所には生えることができない。氷河期になると、気候も不安定になり、また造山運動によつてさまざまな地形が作られるようになった。²、洪水^{こうすい}が起

35

30

25

20

こる河原や土砂崩れ後の山の斜面など自然界に偶発的にできた不毛の土地が雑草の祖先の棲みかとなった。人間がいなかった時代、彼らの生活場所は、特殊なごく限られた場所だったはずである。

3

②、人類が出現して彼らの生息範囲は一変した。

人間が自然環境を改変し、強い植物が生えないような環境を作りだしたのである。人々が農耕を始め、村を作ると、そこは雑草たちの安住の土地となったはずである。

ヨーロッパでは新石器時代の遺跡から雑草の種子が見つかった。人間が村を作り人間としての歴史を始めた時、そこにはすでに道ばたの雑草の姿があったのである。農耕が始まると村で暮らしていた雑草たちのいくつかは畑にも侵出していった。

とはいえ、人々が暮らすような場所は、植物の生存に適しているとは言えない。

4

、雑草は農作業や草取りなど人々の暮らしに適応して進化を遂げて繁栄していったのである。雑草は、人類と歴史を共にしてきた。そして、今や雑草は、人間なしには生きていけないほどまでに進化を遂げている。

人類は長い歴史の中で、野生の植物を改良して多くの作物や野菜など栽培植物を作り出してきた。ところが勝手に生えているように見える雑草も、じつは、はからずも人間が作り出した植物なのである。

こうした人間と雑草との戦いに終止符を打つべく、人類は最終

兵器を作り上げた。それが、「除草剤」である。

除草剤の登場によって人類は、雑草に困らされることは少なくなつた。昔は、何度も何度も人の手で草取りをしなければならなかったが、除草剤さえまけば草取りをしなくてもすむようになったのである。

除草剤の登場は、多くの雑草を駆逐した。最近では、絶滅が心配される動植物をリストアップした環境省のレッドデータリストに、雑草が名前を連ねる始末である。まさに、除草剤こそが、雑草に対する人間の勝利を声高に宣言するものだったのである。

しかし、戦いはまだ終わつたわけではなかった。除草剤の迫害を受けながらも、雑草たちは反撃のチャンスを狙っていた。そして、ついには除草剤をかけても生き残るミュータント(突然変異体)が現れたのである。

農薬に対する抵抗性は、菌類や昆虫では広く見られるが、菌類や昆虫ほど世代更新が早くない植物では、発達しないだろうというのが定説だった。ところが、追いつめられた雑草はこの定説をくつがえし、ついに禁断のミュータントを誕生させたのである。

除草剤の効かない雑草の出現に対して、最新の研究では、除草剤に頼らず、耕したり、植え付け時期を工夫するなどして、雑草の害を抑える方法が検討されている。

人類の農耕の歴史は、雑草との戦いの歴史だったとも言われている。いつの時代も、人間と雑草とは戦いを繰り広げてきた。それは科学が発達した二十一世紀になっても、何一つ変わっていない。雑草と人の知恵比べは現代でも続いている。人間が繁栄する限り、雑草たちの繁栄もまた続くのである。

③ まだまだ、人類と植物との戦いは果てしなく続きそうである。

エリートではない、Y たちは「雑草軍団」と評価される。

雑草軍団に、けっして悪いイメージはない。むしろ「温室育ちのエリート集団」と言う方が鼻につく感じだ。苦勞の末に花を咲かせた「雑草」に、人々は感嘆し、惜しめない拍手を送るのである。

何とも不思議な話である。雑草は困り者で、人々は雑草と激しい戦いを繰り広げてきた。それなのに、どうして雑草に良いイメージがあるのだろうか。

ただし、「雑草軍団」や「雑草魂」のように、雑草に良いイメージがあるのは、私が知る限りでは、日本人くらいのものである。
④ どうして、日本人は、雑草に対して好意を持つのだろうか。

日本の雑草が、世界の国々に比べて困り者ではないかと言えば、そんなことはない。むしろ、日本の雑草は、かなり手強いと言っている。いい。

何しろ、高温多湿な日本では、雑草はすぐに伸びてくる。数か月

も草取りをせずに畑を放っておけば草ぼうぼうになって、覆い尽くされてしまう。庭の草は取っても取ってもすぐに生えてくる。年に何回も行われる公園や道路の法面の草刈りには、毎年膨大な予算が使われている。農業にとっては、もっと深刻で切実な問題だ。高温多湿な気候にある日本の農業の歴史は雑草との戦いであったと言っている。一方、欧米では、雑草は日本ほどは伸びてこない。日本人の方が、ずっと雑草に苦しめられてきたのだ。それなのに、どうして、日本人は、困り者の雑草を愛するのだろうか。

西洋の人たちにとって、自然は人と相對するものであり、支配すべきものであった。そして、自然に戦いを挑み、自然を克服していったのである。しかし、高温多湿で、植物の成長が早い日本では、自然は豊かな恵みをもたらしてくれる一方で、脅威となつて人間に襲い掛かってきた。そして、日本人は自然の驚異と全力で向き合っていたのだ。

その結果、どうだっただろう。厳しい戦いを通して、人々はそこに尊敬の念を抱かずにいられなかったのではなからうか。日本人にとって、手強い敵である雑草は、良きライバルのような関係だったのかも知れない。

戦いの中で熱い友情が芽生えるというのは、ドラマでは、よくある話である。

人間と雑草との戦いの末にも、どこかお互いを称え合う気持ちが
出たのだろうか。

敵もまた、あっぱれ。互いの強さを称え合いながら、人間と植物
とは戦い続けていくのである。

(稲垣栄洋『たたかう植物―仁義なき生存戦略―』)

120

問一 ―― 線A「強」と同じ画数の漢字を次の中から選び、記号
で答えなさい。

ア、乗 イ、原 ウ、教 エ、勝

問二

―― 線 a・b の言葉の意味として正しいものを次の中から
それぞれ選び、記号で答えなさい。

a、禅問答

ア、お寺で交わされる理想的な問答。

イ、何を言っているのかわけの分からない問答。

ウ、ありがたい救いとなるような問答。

エ、仏教的な徳のない意地悪な問答。

b、宿命

ア、きわめて短い命。

イ、生息している場所。

ウ、利用すべき価値。

エ、定まっている運命。

※頻繁……ひっきりなしに行われること。

※駆逐……追い払うこと。

※偶発的……偶然。たまたま。

※法面……建築や土木で、人工的に造られた傾斜面。

問三 ——— 線B「寄生」の「生」と同じ読みを含む熟語を次から

選び、記号で答えなさい。

ア、生存 イ、生身 ウ、一生 エ、生糸

問七

————— 線②とありますが、人類が出現する前と後で雑草の生

息範囲はどのように変わったのですか。解答らんの字数に合うように本文中の言葉を用いて答えなさい。

問四

————— 線①とありますが、なぜ雑草にとって人間はなくてはならない存在なのです。その理由を「強い植物」という言葉を用いて四十字以上五十字以内で答えなさい。

1 人類が出現する前

〔三十五字以内〕

に生息していた。

問五

〔1〕〔5〕〔4〕に入る言葉を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

2 人類が出現した後

〔二十字以内〕

に生息するようになった。

ア、しかし イ、そして ウ、そこで エ、それでは

問六

〔X〕に入れるのに適切な言葉を★の部分から八字でぬき出しなさい。

問八 —— 線③とありますが、なぜそう言えるのですか。その理

由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

い。

ア、強力な除草剤の開発こそが雑草をなくすただ一つの方法であり、人類はこれからもずっとその研究・開発を続けていくことになると思われるから。

イ、除草剤を使わなくても植え付け時期の工夫などで雑草の害を抑える方法が見つかったので、今度はその方法を研究していくことになるから。

ウ、雑草との戦いには一応の決着が見えてきたが、他の植物との戦いについてはまだまだこれからであり、そこには終わりが見えそうにないから。

エ、雑草を駆逐したい人間はこれまで様々な手段で対策を立ててきたが、その度に新たな雑草が出現してまた違った戦いを繰り広げることになってきたから。

問九

Y

 に入れるのに適切な言葉を次から選び、記号で答

えなさい。

ア、草花の専門家

イ、無名の努力家

ウ、生来の野心家

エ、自然の愛好家

問十 —— 線④について、筆者は、日本人が雑草に対して好意を

持つようになった理由を、西洋人と比較してどのようにとらえていますか。次の空らんひかくに適切な言葉を本文中よりぬき出し、説明を完成させなさい。

西洋人は自然を（①七字）とみなし、克服してきたが、日本人は自然と戦ってきた結果（②四字）を持つようになり、手強い敵である雑草に対しても（③六字）だとみなすようになった、ととらえている。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変・省略したところがあります。)

文を改変・省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については句読点・記号も字数に数えます。

小学校の帰り道、「トオリヌケケンシ」と書かれた道に足をふみ入れた「おれ」(田村陽)は、クラスメイトの川本あずさの家にたどりつく。「おれ」はあずさにその日の宿題を教わるが、次の日、わざと間違えた答えを教えられていたことに気づく。文句を言い、再びあずさの家を訪れた「おれ」は、あずさの祖母の提案により、その日の算数の宿題をあずさに写させてもらうことにする。

次の日の算数の時間。

その日は宿題プリントの丸つけは自分でやる方式で、端から順に立って答えを言っていくように言われた。

このやり方の時に、ドキドキしながら自分の番を待たなくて良いのは久しぶりだった。なにしろ全部合っている。痛快なほどに合っている。さすがだ、^① と思い、俺は一番前の席に坐った川本に向かつて、心の中で手を合わせた^①りしていた……なんともお人好しな^{ひとよ}ことに。

「はい次、田村君」

先生からそう言われ、おれは立ち上がって堂々と答えた。

〔5〕

すると間髪を入れず、周りから声が上がった。

「ちがーう、3だよ」

「そうね、正解は3ですね。じゃ、次。大崎さん」

おれは A と口を開け、プリントをにらみつけていた。

大崎さんが答えた次の問題は、ちゃんと合っていた。その次も、

その次も。要するに、おれが答えたところだけが間違っていたのだ。

けれどそのときはまだ、さすがに偶然だと思っていた。丸つけが

終わり、先生から「一番後ろの人、プリント集めて」の声がかか

る。のったり立ち上がり、順番に集めて教壇の^{きょうだん}前に行く。一番上

に載ったプリントを見て、「え？」と思った。川本あずさと書かれ

たその宿題プリントは、☆。

思わずその持ち主を見やると、川本あずさはまともにおれを見返

して言った。

「見直しくらい自分でやれ、バーカ」

それから、こらえきれないというように声を立てて笑った。

その日の放課後、おれは猛然とあの狭い通路を歩いていった。信じ

られないことに、川本あずさはわざとやっていたのだ。いつものよ

うに先生が端から順に当てていった場合、あの問題をおれが答える

と、最初から計算した上で。しかも自分の解答だけは B 後

で直していた。あまりといえは、あんまりな仕打ちである。

だいたいこれは、最初の件のお詫びだったのじゃないのか？ こ

10

30

1

20

5

25

れじゃお詫びどころか、追い打ちじゃないか。

ムカムカしながら歩いていたら、あつという間にあずさの家に着いた。ちようどおばあちゃんが庭の洗濯物を取り込んでいたところだった。

「あら、ちようどいい。これ持っててちようどいな」

大きな洗濯カゴを渡され、乾いた洗濯物をぼんぼん放り込んでいくおばあちゃんについて歩きながら、その日の一件を言いつけてやった。ふんふんと聞いていたおばあちゃんは、最後に「ありがとね」とカゴを受け取ってから重々しく言った。

「そりゃあ確かに、あの子が悪いね。でも……」縁側に向かって歩きながら、ひよいと振り返って笑った。「なぜあの子に直接文句を言わないの、学校で？」

「……それは」

うつむいて爪先あたりを見ながら、わかってないな、とはがゆく思う。

学校であずさと話したくないからに決まってるじゃないか。あずさに限らず、下手に女子と話したりしたら「ラブだー！」なんてはやし立てられたりすることがあるのだ。特に、極端におとなしい（て言うか学校でしゃべっているのを聞いたことがない）あずさと、何となくみんなから軽んじられている感じの自分、なんて組み合わせ

は、おかしな注目を浴びやすい。いったん注目されてしまえば、数

人がかりでからかわれるのはもう決定したいなものだ。

「今日はお母さんに言ってきたの？」

幸い、おばあちゃんはそれ以上追及することはなく、洗濯物を縁側で畳みながら呑気な声で聞いてきた。

「うち、トモカセギだから……お母さん七時頃まで帰ってこない」

「そう、じゃ、今日の宿題は何？」

「漢字の書き取り」

「じゃ、自分でやるしかないね。どうせなら、ここでやっちゃいなさいな。これを畳み終えたら、おせんざいを作ってあげるから。甘くて熱々で白玉入れてね、おいしいわよ」

そう言われてしまうと、せんざいを食べたくてたまらなくなった。

それで C と縁側に上がり、ランドセルから漢字ドリルを取

り出していると、なぜかおばあちゃんがぐすりと笑った。なんだ？ とそっちを見やると急に真面目な顔になり、

「それはそうと、あずさは遅いわねえ。どうしたのかしら？」

と首を傾げた。そのタイミングを待っていたように、木立の通路を抜けてこちらへ来るあずさが見えた。腕に小さな段ボール箱を抱えている。おれを見つけてその口許をわずかにゆがめたものの、ま

ておれも一緒にのぞき込む。その瞬間、中から「クウーン」という声が聞こえて仰け反るほど驚いた。それは、両方の手のひらに乗るほどに小さな、薄茶色の子犬だった。

「拾った」

必要最低限の説明をして、そのままぼうっと突っ立っている。おばあちゃんはさすがに驚いた顔をして、「あらまあ、ちょっと待ってなさい」とバタバタあちこちの物入れをかき回し始めた。

しばらくして子犬は、おばあちゃんの膝の上に乗る、温めたミルクをほ乳瓶で飲ませてもらった。必死でゴムの乳首に吸いつく犬を見て、おれは何だか胸が苦しいような痛いような、へんな気持ちになった。

「ねえ、こいつ、飼うの？」

「さあ、どうしようかしらねえ」

困ったようにおばあちゃんは言った。

「ここで飼って、お願い」

すると傍らであずさまで言い出した。

「お願い、飼って」

おばあちゃんは交互におれたちを見比べ、「二人でちゃんとお世話できるなら、ね」と言った。おれたちは同時にすごい勢いでうなずき、「できる」と叫んだ。その様子が面白かったのか、おばあちゃん

90

んはおかしそうに笑っていた。

結局その日は突然やってきた子犬に心を奪われてしまい、あずさに文句を言うことをすっかり忘れていた。後で思い出したけど、もうそんなことはどうでも良かった。

次の日、おれは我慢できずに学校であずさに話しかけていた。

「あの犬……どうしてる？」

あずさは目を見開き、しばらくしてから小声で言った。

「元気」

「名前、なんてつけた？」

あずさはしばらく考えていたが、やがて生真面目な顔で言った。

「まだ。だから、一緒に考えよう」

耳を疑うとはこのことだろう。いいの、と確認するとこっくりとうなずく。

「おーすげー、ありがとう」

その場でびよんびよん飛び上がりたくらい、嬉しかった。あずさもつられたように、にっこり笑った。周りで何人かの男子や女子が見ていたけれど、誰一人、「ラブだー」なんてはやし立てたりはしなかった。

「おれ」(陽)は、小学校卒業と同時に引越すことになり、次第

110

105

100

95

にあずさとも会わなくなる。

そして、高校生になった「おれ」は、ある時を境に、人に会うことが怖くなり部屋に引きこもるようになる。

その部屋に引きこもってからちようど一年経った頃、おれに「客」がやって来た。

「誰にも会わない」

おれはドア越しに、いつものセリフを繰り返す。ところが母親の態度はいつもとは違っていた。

「会いなさい」ここ何年も聞いたことがないような毅然とした口調で、母は言った。「お母さんも、今その方とお話ししました。あなたは、会わなくちゃ駄目なのよ」

「嫌だっば。どんな人間だろうと、誰にも会いたくない、会わないって言うてるだろ」

「——人間じゃなければ？」

ドア越しに、若い女の子の声が出た。おれははっと身を硬くする。いつか、どこかで、聞いた声のような気がしたのだ。声は、たたみかけるように言った。

「ポチになら、会いたいんじゃない？」

その瞬間、おれは泣きそうになった。それはおれと一人の女の子とで、散々悩み、延々と考えたあげ句の果てにたどり着いた犬の名

130

前……ありふれて平凡極まりないけれども、この上ない気持ちのこ

もった名前だったから。

「……川本……あずさ？」

錆び付いた声で、ようやく言う。

「やっと気づいたか、バーカ」

にくったらしい口調で相手は言い、ああ、間違いなくあずさだと思った。

「なんで？」

混乱する頭を抱えながら、おれは呻くように言った。川本あずさと学校でしゃべったり、犬に会いに家に行ったり、ついでにそこでおやつを食べたり宿題をしたりしたのは、せいぜい小学校四年生くらいまでのことだ。その後はクラスも離れたし、お互い塾やら同性の友だちとの付き合いやらで忙しくなり、自然と疎遠になってしまった。卒業してからはおれが引越したこともあり、一度も会っていない。年賀状のやり取りさえしていない。なのになぜ、今頃になって川本あずさがやってくる？ わけがわからなかった。

「このままでいいから、話を聞いて」

そう言われても、いいとも悪いとも答えられない。あずさはかまわずに続けた。

「こないだ小学校の同窓会があつてね、それで陽くんのこと、聞いて

150

125

120

115

145

140

135

たよ」

そう言われ、途端にひどくささくれた気持ちになった。

「だから、ナニ。おれが引きこもってるって、みんなが知ってる噂してると、わざわざ教えに来てくれたの。それとも……」ど

んどん意地悪な口調になるのを、どうしてもめられなかった。「川本が何かしてくれるの？ 手えつないで、お外へ出かけましょって？」

「陽くんがそうしたいなら。でも違うよね。あのね、私は昔、陽くんに助けてもらった。本当に、救われたの。だからって今、私が陽くんと同じことができるなんて思わない。そうできればいいなって思うけど……」

「何言ってるんだよ。おれはおまえを助けたことなんてねえよ。救ったって、何、それ。他の誰かと間違えてんじゃないの？」

「間違えてないよ」くつきりとした声で、あずさは言った。「私は子供の頃、出口のない道を歩いていたの。とても苦しかった。学校に行くのが嫌で仕方がなかった……ちようど今の陽くんみたいにね。でも、陽くんがあの家に来てくれたときから、それが変わったの。

本当に、真つ暗闇からぱつと昼間の世界に飛びだしたくらいに変わったの。担任の先生も病院の先生も驚くくらいに」

おれは当惑しながら相手の話を聞いていた。当時の川本あずさが、本人が言うような劇的な変化を遂げたとは全然思えなかったから。

「陽くんは知らないの。あなたが私にどれだけのことをしてくれた

か、なんて。あのね、場面緘黙症^{かんもくしょう}って言葉、聞いたことある？

ないわよね、今でも、あまり知られていないみたいだから。とにかく、私もそれだった。生まれてからあの頃までずっと、家以外の場所ではまったくしゃべれない女の子だったのよ。しゃべらないんじゃないの、しゃべれないの。どんなに話しかけられても、無理なものは無理なの。先生だけはそのことを知っていたから、無理に私にしゃべらせるようなことはしなかった。クラスメイトたちは、私のことを極端におとなしい子とか、全然しゃべらない変な子くらいにしか思っていなかったんじゃないかな」

『だまされた、バーカ』

ふいにおれの中で、にくったらしい女の子の声がかたまる。あるとき傍らで、先生がびっくりしたような顔をしていた。あれは普段おとなしい子が乱暴な口をきいたからじゃなくて……。

「……私は、陽くんのおかげで出口を見つけたの」あずさは一人、話し続けていた。「ポチはね、本当は捨て犬じゃなかったの。全部計画的だったの。おばあちゃんがね、近所の人からわざわざもらって約束をしてきたの。それをあの日、私が寄り道してもらいに行っ

たの。その前に陽くんが、犬を飼いたいようなことを言っていたから。陽くんがまた、うちに来てくれるようになって。本当にそうなくて、おかげで、陽くんとなら、学校でも話せるようになったわ。そのうちに、他の人ともしゃべれるようになった。今じゃ、初めてお邪魔するおうちで、こんなにたくさん話せるようになったよ」

おれはただ、黙ってあずさの話を聞いていた。なんと行って良いか、わからなかった。

全然、そんな、感謝してもらえないようなことをしたわけじゃない。ただ、文句を言いたいとか、おやつが食べたいとか、子犬に会いたいとか。まったく呆れるほどに自分本位な欲求でしかなかった。もし当時、あずさの抱えた問題について、先生なりおばあちゃんなりから聞かされていたとしたらどうだろう？

ひよっとすると、えいっと投げ出したくなっていたかもしれない。自分の理解を遥かに超えた、重たすぎるような話に辟易して。

そこまで考えて、おれは自分を笑いたくなくなった。おれの今の情況だって、他人から見れば重たくて、近寄りたくもないような代物じゃないか？

「……で？」ようやくおれはかすれた声を喉から引きずり出した。

「結局、何しに来たわけ？」

ドアの向こうは、しんと静まりかえった。焦れたいような時間

が流れ、やがて廊下に「クーン」という鳴き声が響いた。とたんに胸がカツと熱くなる。

「……そこにいるの……何？」

「ボチの孫」

明瞭で短い答えが返ってきた。

「名前……なんての？」

「まだないよ。これから二人でつけようと思って」

「……なんでおれが」

「『おーすげー、ありがとう』じゃないの？」笑いを含んだ声であずさが言う。「名前つけるの、当たり前でしょ。これから陽くんが飼うんだから」

そう言われ、一度にいろんなことが頭の中に渦巻いた。この家に引越してきて、「犬を飼いたい」と伝えたら「近所迷惑だし、世話できないだろう」と両親から頭ごなしに言われたこと。高校二年

の時、仲が良いと思いついていた友だちを些細なことで怒らせ、以来陰湿な嫌がらせを受けるようになったこと。まるで太陽みたいに陽気で、裏表のないヤツだと思っていたのに……。『太陽を怒らせると影ができる』なんてフレーズを、突如思い出したりもしたこと。

最低の噂を流され、皆がそれをすんなり信じてしまったこと。しまいに、学校だけでなく行き会うすべての人間から、「おまえは最

「低だよ」という眼で見られるようになったこと……。

そんなのは自意識過剰の思い過ぎだとはわかっていても。それでも苦しかった。辛かった。他の誰よりも、弱い自分が嫌いでたまらなかった。

「無理、だよ」

そうおれが言うのにかぶせるように、「無理じゃない」とあずさが言った。「この子はまだ小さいから、散歩が必要になるまでもう少しかかる。必要になってからだって、うんと朝早くでも、夜遅くても、ほんの少しだけでも外に出ればいいじゃない」

「……だけど」

「バーカ、バーカ、ほんとにバーカ」心底むかつく口調で、ドアの向こうのあずさは言った。

「飼いたかったんでしょ、ずっと。今は誰も駄目って言ってないのに、今度は自分で駄目だと決めるの？ 相変わらずバカなんだから。もういいよ、強行突破、えい」

ドアノブのところまでカチリと音がして、鍵が外れてしまった。それは外からコインで開けてしまえるような、ごくちゃっちゃい鍵でしかなかったから。

細めに開けられた隙間から、薄茶色の子犬がよたよた入ってきた。思わず手を差し伸べて、抱き上げる。その瞬間、自分がそれをどれ

250

245

240

235

ほど欲しがっていたかわかった。

こちらを真っ直ぐ見上げてくる丸い眼に、柔らかな毛並みに、ぬくぬくと温かな、確かな重み……。

「あのね、いいこと教えてあげる」ドアの向こうの女の子は言った。「ポチはまだ、生きていますよ。おばあちゃんも元気で、私と一緒にまだあの家に住んでる。だから、いつかその子と一緒にまた遊びに来よう……あの道を通って」

トオリヌケケンシのあの道？

「ただし」いたずらっぽい笑い声の後で、あずさはつけ加えた。「おばあちゃんが言ってたよ。ポチも私もトシだから、そういつまでも待ってはいただけませんよって」

いつの間にか、おれの両頬を涙が伝い落ちていた。手の甲に落ちた一粒を、子犬がぺろりとなめ取ってくれた。

⑤ たとえ行き止まりの袋小路に見えたとしても。根気よく探せば、どこかへ抜け道があったりする。目の前を塞ぐ扉は、硬貨一枚で開いてしまったりもする。それがどこへつながっているかは、誰もわからないことだけれども。

おれは涙に濡れた顔を上げ、この場にもっともふさわしい、お礼の言葉を口にした。

「——おー、すげ……ありがとう」

270

265

260

255

ドアの向こうで軽やかな笑い声が聞こえ、膝ひざの上の子犬が甘えるようにひと声鳴いた。

(加納朋子『トオリヌケ キンシン』)

※辟易……うんざりする事。

問一 —— 線①とありますが、ここでの「おれ」の気持ちとして

最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、お願い
- イ、お詫び
- ウ、感謝
- エ、祈り

問二 A C に入る言葉として適当なものを次から

それぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア、いそいそ
- イ、うろろうろ
- ウ、ちゃっかり
- エ、あんぐり
- オ、きよとん

問三 ☆ に入る内容を考えて、十字以内で答えなさい。

問四 ~~~~~ 線 a 「はがゆく」、b 「ささくれた」の意味として適

当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「はがゆく」

- ア、いじらしく
- イ、もどかしく
- ウ、はずかしく
- エ、にくらしく

b 「ささくれた」

- ア、とげとげしい
- イ、そらぞらしい
- ウ、ばかばかしい
- エ、いたいたい

問五 ——— 線②とありますが、このときの「おれ」の心境として、

最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア、算数の宿題でわざと自分に恥をかかせたあずさに文句を言うつもりだったが、おばあちゃんがぜんざいを作ってくれ
るといったので、すっかり機嫌が直っている。

イ、算数の苦手な自分をばかにしたあずさに文句を言うつもりだったが、この家で子犬の世話をさせてもらいたいので文句を言うのはやめようと心に決めている。

ウ、正しい答えをきちんと教えなかったあずさに文句を言うつもりだったが、子犬の名前をどうするかが気になって、不満を感じなくなっている。

エ、自分あたりそうな問題だけ、わざと間違った答えを教え
たあずさに文句を言うつもりだったが、子犬のかわいさに
夢中になって文句どころではなくなっている。

問六 ——— 線③とありますが、ここでの「おれ」の気持ちとして

ふさわしくないものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、喜び イ、おどろき

ウ、恐怖心 エ、なつかしさ

問七 ——— 線④とありますが、

(1) これを言いかえた部分を——線④より後の本文から探し、

十六字でぬき出して答えなさい。

(2) あずさが「陽くんに助けてもらった」とは、具体的にはどう
いうことを指しているのですか。本文の言葉を用いて七十五
字以内でまとめなさい。

問八 ——— 線⑤とありますが、「おれ」にとって、「行き止まりの

袋小路」とはどのような状態のことですか。四十字以内で説
明しなさい。

問九 この小説は実際にこの場面が終わっています。もし続きがあ

るとしたら、どのように展開していくのがふさわしいでしょ
う。最後の場面を参考にして、自由に書きなさい。

